

『3.11からの手紙/音の声』――

自分の目で見たい、耳で聞きたい、足で立ちたいんです

ゲスト 石井麻木 写真家

聞き手：Misao Redwolf（首都圏反原発連合）

石井麻木写真展【3.11からの手紙 / 音の声】オフィシャルサイト <https://www.311tegami.com>



カメラをむけることが暴力にならないように

Misao 東日本大震災が起きた2011年3月11日、石井さんは何をされましたか？

石井 翌日からのカンボジア地雷原で暮らす人々の写真展の準備をしてました。東北が大変なことになっているというので、すぐに支援物資を集め、車で届けにいこうとしたんです。でも、十分なガソリンが手に入らなくて、いろいろな人の車に乗せてくださいと頼んだのですが、原発が爆発した次の日だったので「女性と子供はまだ入るべきじゃない」と、どの人も言われて。すぐにでも被災されてしまった地に入りましたが、行くことができませんでした。それで、集めた物資を持っていってくれる人に託すことを始めました。

とにかく現地に飛んでいて、自分の目で見たかったんです。写真を写すためではなくて、なにが起きているのか、現地の人は今何を一番必要としているのかを知りたくて。やっと現地に入れたのは2週後だったんです。車に乗ってくれた方がいて。福島県内の5か所の避難所を回らせてもらって、物資を届けることができました。私は常にカメラを持っているので、写つつもりはないけど肩から隠すように掛けてはいたんです。みなさん着の身着のままで避難されて、お風呂にも入れていない、心身共に傷つき疲弊されている状態でとてもじゃないけどカメラを向けられる状況じゃない。そういうときにカメラを向けるのは暴力でしかないと思っていました。

でも、避難されている方がカメラを見て、「この地獄のような状況を写し

て全国に伝えてほしい」と声をいただいて。そうか、写真はそういう役目にもなれるんだと思って、暴力にならないように、これ以上傷付けないように、写してもいいところや人だけ、写させてもらうようになりました。その後は自分の車で行けるようになったので、物資と寝袋を積んで毎週のように走って、避難所と仮設住宅に通いました。8年以上たった今でも月に2回くらい、11日の月命日には可能な限り行っています。

原発については一般的な知識しかなかったので、事故のあとに勉強しました。事故が起きてからじゃ遅いのに。東京の電力を福島でつくってくれていたことも知らなかったんです。福島でつくられた電力で生きてこられたことを初めて知って、申し訳ない気持ちと、ありがとうございましたという気持ちと、とにかくごめんなさい、恥ずかしいという気持ちになりました。だから福島の方たちと福島の地にできることがあるのであれば、恩返しといつたら変ですが、なんでもさせてほしいと思って、毎月福島に通わせてもらっています。

どちらを選んでも福島の方は傷を負ってしまったじゃないですか、あの時。避難することを選んだら逃げたと言われて、残ることを選んだら、なんで危ないので逃げないと他県の人に責められて。どちらを選んでも、傷つけられて。この8年間、福島の方達のあらゆる生の声を聞いてきました。どれも本当の声で、正しい正しくないではなく、それはその人が決めることが多いので、悩んで悩んで選んだ答えを全身で肯定したいです。

知らないとゼロのまま

Misao 福島や東北のことを全国の人々に伝えるために、写真展『3.11からの手紙/音の声』を全国各地で30か所以上開催されています。何か手ごたえはありますか？

石井 写真を持っていくことで、8年分の一部だけでも見て知ってもらうことができます。「初めて知ることができよかったです」「必ず現地に行ってみます」という声がものすごく多いです。知らないとゼロのままだけど0.1でも1でも知れば、それは百にも千にも万にもなる可能性がある。人に伝えることもできるし。そうしたら、どんどん広がっていくから、まずは知ることが大事だと思っているので、写真から少しでも伝わってくれるのはとてもうれしいです。

写真展は全国各地で開催させてもらっていますが、東北でさせていただくことも多いです。東北では、思い出してしまって辛いと思う人、苦しくなる人もたくさんいると思うので、「無理して見ないで下さい」といつも伝えているんですけど、それでも見たいといって、見てくれる人が多いんです。「笑顔の写真や光の写真が多いので、辛いだけじゃない、悲しい思い出だけじゃ



Walk and Talk it 視聴者には見たい人間と見たくない人間がいる――

NONUKES ENERGY AUTONOMY

映画『ウルフ・オブ・ウォールストリート』

マーティン・スコセッシ監督『ウルフ・オブ・ウォールストリート』(2013年)の上演3時間のほとんどで、投資詐欺師ベルフォートと仲間たちが金・ドラッグ・セックスを追い求める様子が描かれている。作品自体が詐欺の手法を模倣しているかのように、本来なら眼や皮膚に薬物の影響があるはずが隠されその表情はキラキラとしている。

2時間50分後、かつてベルフォートに「地下鉄で帰れ貧乏人！」と罵られたFBI捜査官デナムが地下鉄車内に目を向けると、それまで登場しなかった疲れた「貧乏人たち」が約20秒間映される。ここまで「キラキラしたクズたち」に魅了されていた観客は「こんな顔は見たたくない」

と感じてしまうかもしれない。これは、私たちが見たい人間と見たくない人間を分けていることを突き付けるための、スコセッシが仕掛けた罠なのだ。

福島第1原発事故で自主避難し公務員宿舎に住む人々の退去期限が1カ月過ぎ、福島県は家賃の2倍を請求する方針、というニュースはひっそりと、5200万円を使ったという安倍首相の「桜を見る会」のニュースは大々的に報道された。視聴者には見たい人間と見たくない人間がいる。だからニーズに合わせてニュースを提供します、ということだとしたら、果たしてそれは報道といえるのだろうか。(TH)

ないから救われました」という言葉をいただけたときには、そうか間違つてもいなかつたんだと思いました。正しいのか正しくないのかは、今でもわからないけど。永遠に、その答えは出ないと思います。



Misao 石井さんが生きていく上で、大事にしていることについてお聞かせください。

石井 信じることとあきらめないこと。私はすごく信じやすくて、その分、傷もいっぱい負ってきたのですが、それは悪いことだとは思ってないんです。何もかも疑ってというのは、もちろんそれも一つの生き方だと思うんですけど、私は信じたくて。人も自分も。そして始めたからにはあきらめたくはない。写真展も自費で全国を回っているのですが、金銭面もそうだし体力面も、とっくに限界を超えてるんですけど、伝えて欲しいっていう声がある限りは、見たいと待っていてくれる人がいる限りは、届けることをあきらめたくないんです。

Misao 写真展は入場無料でやられていて、収益はないんですよね。

石井 はい、東北や震災のことでも1円も受けとりたくない思いから、利益は1円もない状態でやっています。それでも伝えたいから続けていますが、気力も体力も心も折れる時もあるし、これまで最後かもしれないと思うこともあるけど、でもその度に、いや全然まだ足りないって思ったりします。まだ伝えられていない土地もあるし、まだ、そこで待っていてくれる人たちもいるし、あきらめている場合じゃないと思って、毎回、次の地に、次の地にと自分で自分の背中を押しているような感じで進めています。

人の数の分だけの光が天の川みたいに見えて

Misao 2012年の夏に『再稼働反対!首相官邸前抗議』で官邸前に人があふれたとき、石井さんはヘリコプターから空撮をされていたんですよね。

石井 はい。IWJ(インディペンデント・ウェブ・ジャーナル)とOPK(オペレーション・コドモタチ)が集めたカンパで飛ばしたヘリに乗せてもらいました。ヘリが想像以上の揺れで大変でしたが、思い切り息を止めてシャッターを切っていました。これはどうやっても写真に収めないとと思って。この熱を伝えないと、残さないとと思って。デモの人たちの、あのときの光はなんの光だったんだろう？ 人の数の分だけの光が、光の粒たちが、地上の天の川みたいに見えてすごく美しくて。人々の思い、声を上げようとしている姿。熱のかたまりみたいなものが空まで届いていました。

Misao あの時あそこにいた人たちの思いが、写真になって残るというのはすごく大事で素晴らしいことだと思います。あの時、地上でデモの先頭にいた私が、それを空から見ていた石井さんと、7年たってはじめてお目にかかるのは、なんだか不思議な気分です。石井さんは、デモにも参加されていたんですね。

石井 とにかく、頭数のひとつになりたいと思って参加していました。私がも

うひとりを連れて行けば、2になるしと思ってました。1ってすごく小さいけど、すごく大きいじゃないですか。ゼロはゼロのままだけど1は百にもなると思っていたので、ゼロではない1でいたかったというのがあって、行かせてもらっていました。あのときは、本当に変えられるんじゃないかなといふ、すごい流れがありましたよね。

そのおばあちゃんの顔が忘れられなくて

石井 2011年4月の月命日に、宮城県の山元町の避難所で、一人のおばあちゃんが1枚のしわしわの家族写真を見せてくれたんです。家族みんなが笑って写っている、たわいもない日常の一枚なんですが、すごくいい写真で、それだけを肌身離さず持っていたらして。津波で流されて家はなくなってしまって、亡くなった人もいて、家族がバラバラになってしまって、どこにいるかわからないとおしえてくださいました。

でも、この1枚の写真に全員がいるんだと言って、泣きそうな笑顔で見せてくれたんです。そのおばあちゃんの顔が忘れられなくて。写真は言ってしまえば紙切れなんですね、1枚の紙切れなんんですけど、そこに家族の会話だったり温度だったり、食卓で食べたご飯の味だったり、歴史だったりが全部詰まっています。そういう力にもなるんだということを、そのときあらためて気づかされました。

毎回行くたびに会っている方たちもいます。お母さんたちが娘のようにかわいがってくれて、「おかえり、また帰ってきた！」と言って迎えてくれるのが、すごくうれしいんです。義務感とか使命感で毎月通っているのではなくて、本当に行きたくて、帰りたい場所に帰っているような感覚なんです。「月命日にひとりでいたくない」という声を聞いてから、月命日には必ずおじやましているんですけど、それだけじゃなくて、私自身が会いたいから通っています。

Misao 私もいわきに親しい友人がいて、3.11の前からよくいわきに通っていて、第二の故郷のように感じています。東北には純朴さがまだ残っていて、心安らぎます。

石井 ほんとうにやさしいんですよ、東北の人たちは。辛抱強く、我慢強くして。通うようになって、第二の家族ができたみたいな感じで、すっかり大好きになってしまったんです。ほんとうに落ち着くし、温かいし。私は東京で生まれ育ちましたが、一度も東京を好きになれたことがないんです。でも、東北は一瞬で好きになって。こういう活動をしているから、いろんな人に東北出身だと思われているんですけど、自分でもそう思い始めているぐらいで、向こうにいる時間の方が長いし、そう言われてうれしいくらいです。自分でも、「あれ、自分は東北生まれたかも」とたまに思うくらい大好きで、大切です。

インタビュー全文はこちらでご覧いただけます

<http://coalitionagainstnukes.jp/?p=12887>



石井麻木写真展【3.11からの手紙 / 音の声】<https://www.311tegami.com>

2019年9月25日(水)～30日(月) 10:00-21:00(最終日は17:00まで)
at 岐阜 アクティブG 2階 Gストリート(JR岐阜駅直結) 入場無料

2019年10月9日(水)～21日(月)10:00-18:30
(火曜日定休(10/15火曜日はお休みとなります))
at 熊本県トヨタカローラ熊本(株)東バイパス店 入場無料

次回予告 NO NUKES! human chains vol.11 (2019年12月号掲載)
このインタビュー・シリーズでは、ゲストのかたに次のゲストをご紹介いただきます。
石井麻木さんからは、西片明人さん(ライサウンドエンジニア/東北ライブハウス大作戦・代表)をご紹介いただきました。



3.11からの手紙 / 音の声 (増補改訂版)

写真・ことは 石井麻木

定価:2,200円(+税)
発行元:シンコーミュージック・エンタテイメント



東日本大震災直後から毎月写し続けてきた6年間の東北の様子を、言葉とともに時系列で掲載。そして、その間に東北の地で鳴らされてきた音楽の写真。復興どころか復旧もままならない場所がまだあるにも関わらず、世間では関心が薄れつつあるのも事実である今、少しでも風化を防ぐため、写真と言葉で届ける本。懸命に東北の地で生きる方々の姿、そして、その地に音の声を届けるたくさんのアーティスト。あの日からの精一杯の手紙。

編集後記

9月11日に第4次安倍再改造内閣が発足、脱原発を訴えていた菅原一秀氏が経産相に。しかし就任翌日に「原発ゼロは将来的に考へても現実的ではない」と述べました。政権の人気維持のために入閣した小泉進次郎氏が環境相に、福島第一原発のトリチウム水海洋放出問題をどう扱うのか、注視が必要です。

台風15号の影響で東電サービスエリア内で93万軒以上が停電、全面復旧まで相当な時間がかかりました。北海道胆振東部地震でも言えますが、地域分散型の電力供給が普及していれば、被害の拡大を防げたのではないかでしょうか。原発ゼロ・再エネでの地域分散型発電を推進するエネルギー改革を！